



図書館情報大学実習生 実習体験記

今年は9月11日(月)~29日(金)の3週間、図書館情報大学実習生12名が実習をしました。



実習生の受講及び実習風景

粕川 昌子

情報が氾濫している今、それらを収集し管理していくことは思った以上に大変で、大切であると感じた。筑波大学の様に広く所蔵量の多い図書館では、まぎれこんだ資料は簡単に探し出せない。

図書館の資料は共通の情報資源である。本を決まった場所に返すという最低限のマナーを守ってこそ図書館の意義が見出されるものだと思う。実習の多くを費やしたシェルフリーディングの大切さを学ぶと共に、利用者の小さな心懸けが互いの使いやすい環境をつくり出すものだと思った。

(かすかわ・まさこ 図書館情報学科3年)

松浦 蔵人

図書館の実際の仕事を体験してみて思ったことは、図書館の仕事というのは肉体労働だということだった。実際に体験する前からある程度の予想はしていたが、実際はそれ以上だった。主に雑誌サービス係で実習させてもらったが、立ち仕事が多く、裏舞台の仕事をした。もちろん、そういった仕事ばかりでなく、頭脳労働もあったが肉体労働の印象は、とても強く残った。しかし、そういった仕事の実験を知ることができたのは、とても有意義で、必要なことだと思った。

(まつうら・くらんど 図書館情報学科3年)

梅沢 聡子

雑誌係で実習をさせていただきました。雑誌は書誌事項が継続し変化するので管理が大変です。

データの入力にせよ、配架の整備にせよ、利用者がほしい情報を確実に手に入れるために大切なことばかりでした。また、シェルフリーディングではあるべきところにあるべき本を置くことは図書館の信用に関わることでありますから、面倒くさがらなければいけないことを実感しました。

そして、職員の皆さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

(うめざわ・さとこ 図書館情報学科3年)

佐藤 由紀江

今まで大学で学んできた図書館業務の実際を知ることができた。筑波大学附属図書館では、講義での知識を余す所無く引き出してくれた。大規模な大学図書館だからこそできる、他では実現し得ないような組織化された業務や、受け継がれてきた歴史としての資料、貴重な古典資料、そして最新の技術・サービスをもって利用者のニーズに答えていること。その資料の集中化と全面開架を支えるために、多大な労力を費やしていること、図書館の保存と利用という矛盾する宿命を身をもって実感した。

(さとう・ゆきえ 図書館情報学科3年)

斉藤 亜希子

今回の実習では、運用コースということでメインカウンターやレファレンスカウンターでの業務や、相互貸借、蔵書の管理作業などを中心に学ばせていただきました。中央図書館は、学内だけでなく学外からも多くの利用者が来館する大規模な図書館なので仕事は大変でしたが、利用者の立場では気付かなかった発見がありました。職員の皆さんの指導のおかげで色々な業務を体験し、図書館の仕事の実際を知ることができました。今回の実習で学んだことを今後役に立てて行きたいと思っています。

(さいとう・あきこ 図書館情報学科3年)

石井 梨奈

大学で図書館の勉強をしているので、図書館員の立場から図書館について理解していると自分で

は思っていました。しかし、実際の業務を体験してみなければ分からないことがたくさんあると感じました。図書館というのは常に利用者のことを考えています。利用者の要望になんとか応えて差し上げたいと努力しています。図書館は「本が置いてある場所」というだけのものではなく、情報と情報を探している人を結ぶための手助けをしてくれる場所であると実感しました。

(いしい・りな 図書館情報学科3年)

清水 めぐみ

今回の図書館実習で、これまでに授業で学んできたことが、現場の業務の中に実際どう組みこまれているのかということを知ることができた。「図書館の仕事は体力勝負」だと何度か聞いてきた言葉の意味を、この3週間でじっくり実感した。現場に来て初めて分かる細かい事情や、今まで利用者側の視点から見ていたことを図書館員側から見てみること等、数々の貴重な体験をすることができ、充実した日々を過ごした。実習で学んだことを将来に生かして行きたいと思う。

(しみず・めぐみ 図書館情報学科3年)

大河 友佳

今回の実習では、図書館の表舞台であるカウンター業務に参加するとともに、シェルフリーディング等の裏方の業務も体験することができ、図書館業務の全体像を知ることができました。カウンター業務は貸出と返却の場と思っていましたが、実際に立ってみると関連する仕事がいくつもありました。また、レファレンスで受けるような質問を受けることもあり、業務の多様さに驚きました。

今回の体験で今まで学んできた理論を実感したり、違いを発見し、大きな財産になりました。

(おおかわ・ゆか 図書館情報学科3年)

工藤 めぐみ

この実習では、主に目録に関する業務を体験した。これは利用者と直接関わることはないが、図書館にとって大切な業務の一つである。実際に携わってみて、大学で得た知識が役に立ったこともあった。逆に、体験してみて気が付いたこともたくさんあった。例えば、質の高いデータにする為に、いかに注意を払わねばならないかということや、洋書を扱う場合は言語だけでなく、各国の出

版事情などの知識があると便利だということだ。

実習期間中、職員の方には熱心に指導していただき、ありがとうございました。

(くどう・めぐみ 図書館情報学科3年)

石田 枝里香

この実習を終えて感じたのは、図書館は職員の技術一つ一つが集結したものであるということだ。利用者からは見えないところで、沢山の技術者がその専門の技術をもって図書館を形成している。それを理屈では判っていたが、実際目にして、専門ごとの分担が緻密になされていることに驚いた。目録は精確さを求められる作業だったが、職員の方々のお力添えによりスムーズに行うことができたと思う。辛いことや大変なこともあったが、この実習をこれからの糧とし、頑張っていきたい。

(いしだ・えりか 図書館情報学科3年)

竹村 寛子

この実習では、扱う資料の種類の高さに改めて大変さを感じました。古典資料のような歴史的価値のあるものや、電子ジャーナルのような新しい形態の資料まで、各々対応の仕方が異なりますし、利用者への提供の仕方も異なります。職員の方々がそれぞれ苦心しながら、図書館をつくられている様子を知る事ができました。今回は主に和図書の目録作成を学びましたが、古典資料での糸綴じの体験というユニークで楽しい体験もできました。このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

(たけむら・ひろこ 図書館情報学科4年)

高田 裕文

私にとって実習に行くことは、初めて図書館の実際の現場に行くことでした。それだけに、頭の中の図書館と、実際の図書館との差が感じられました。図書移動の重さや辛さが授業でわかるわけがなく、一方で、自分の作成した目録が次の日には利用に供される、という充実感もまた教科書には載っていません。また、図書館の方々の親切で忍耐強い指導は、現場に即した重みがありました。今回の実習は、想像していた図書館と実際の図書館とを摺り合わせる貴重な時間だったと思います。

(たかた・ひろふみ 図書館情報学科4年)